

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	横田 むつみ 比較社会文化学専攻 2015年度生		論文題目	唐代女性詩人の詩と文学 —上官昭容(婉兒)、李冶、薛濤、及び魚玄機の詩作から—
審査委員	主査:	和田 英信 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副査:	伊藤美重子 教授		「否」の場合の理由
	副査:	松岡 智之 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	宮尾 正樹 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	伊藤さとみ 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学) (Ph.D.in Chinese Literature)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

中国の古典文学は男性の文学であったといっても過言ではないほど、作り手・読み手ともにその多くを男性が占めていた。文学に接する機会があった女性は宮中の后妃や文人の周囲にあった例外的な女性に限られていた。状況にやや変化が見られるのは唐代で、とくに中唐期以降、妓女や女道士が、士大夫層との接触のなかで新たに詩を読み、詠むようになる。本論文は、初唐期の宮廷詩人上官昭容、盛唐から中唐初期の女道士李冶、中唐の宮妓薛濤、そして晩唐の女道士魚玄機を取り上げ、こうした新しい階層から詩人が生まれる背景、彼女らの詩の特質を論じるものである。

第一部「宮女の詩作」では、上官昭容が宮廷にあって応制詩等にすぐれた才を発揮したことを示しつつ、当時の宮廷詩壇を主宰した彼女の存在が、近体詩の形成過程においていくばくか関与した可能性に触れる。

第二部「妓女・女道士の詩作」第一章は、李冶について論じる。安史の乱ののち、唐代社会のありかたは大きく変動したが、当時士大夫の集うサロンとしての機能をもった道観が士大夫と女性道士の接点となり、女性による詩作の契機となった。李冶はそうした女性詩人の最初期の一人であった。本論文では皎然らの湖州の文人サークルとの具体的な交友のさまをその詩作を通じて探る。

第二章は劍南西川節度使幕府の宮妓であった薛濤について論じる。節度使を中心とする文人の中に立ち交じって、送別・贈答等の詩をみごとに詠いこなし、四十年余りにわたって宮妓をつとめた薛濤の詩人としての高い技量をその作品に即して分析する。

第三章は晩唐の女性道士魚玄機を取り上げる。魚玄機の詩は従来の女性詩人にまして幅広い主題を詠うところに第一の特色が認められる。本論文では「恋情」「悼亡」「閨怨」など、男女間のさまざまな感情を詠う詩を取り上げ、それが男性による詩の主題・表現の模倣に留まらざるを得なかったことを指摘しつつ、幅広い主題を詠うところに魚玄機自らの表現拡大への情熱を見だし、さらには彼女が当時の文学環境における女性の限界に自覚的であり、表現者としての限界に葛藤を抱えていたことを指摘する。

従来士大夫の詩においては個人的な男女間の感情を詠うことは憚られ、楽府等の虚構の設定の中でのみ恋愛が詠われてきた。第三部「新たな恋情の詩」は、相手を思う、恋するという意の語「相思」の用例を通時的に概観したうえで、本論文に取り上げる女性詩人たちの用いる「相思」は、特定の男性に対する恋愛感情が込められたものであること、すなわち恋情を詠う詩が女性詩人たちによって作りはじめられた可能性を主張する。

審査委員会は最終審査会を含めて三回行われた。そこでは、論点の矛盾や掘り下げ不足の箇所、詩の読みの不正確な箇所、用語の不適切・不統一等を指摘し、修正を求めた。本論文が、研究の蓄積の多くない女性詩人について、基礎的情報ならびに先行研究の成果を集成したうえでこれを着実に踏まえ、今後の研究への展望につながる知見を見いだしていること、審査委員から出された問題点、修正要望について真摯に対応したこと、公開発表会において会場からの質問に的確に回答したことなどを評価し、博士(人文科学)、Ph.D.in Chinese Literatureの学位にふさわしい論文であると認定した。